

も、阿闍世王や龍王が脆坐合掌して、樹下の空しい寶座や、唯天蓋の下の人なき寶座を拜して居るに過ぎないのを見ても、何等怪しむに足らぬ譯である。

第一の大奇蹟

之までのものが、何れも皆、明かになり、離れない關係にあるのが知れ、前に約めて云つた時には、——佛陀を現はさず其生涯を寫すのであるから、之程奇異な事はないのであるが——この極めて不自然に見えた點も諸事實を時代順に考へるに至つて、佛教美術が當初から取つた全く合理的な結果であると考へられる様になつた。然しこれでは、猶ほ四足具有とはいへないので、更に一つ缺けてゐる。上來、殊更四大奇蹟の第一、迦毗羅衛の降誕を別にしておいたが、之にも特殊の象徴を決める場合に達したので、こゝに新しい點を述べる事になる。之について、余が如何なる選擇の道を取つたか、而して蓮を選ぶに至つた決定的理由は詳細に、『印度考古學調査紀要』中に長篇として述べておいたから、他日清覽を得る事もあらうと思ふので、こゝでは、この